令和５年度　文部科学省指定【つるぎ町立貞光中学校】～研究紀要より～（一部抜粋）

Ⅰ　研究の概要

１　学校の特色や学校をとりまく地域の教育的環境

本校は徳島県西部のつるぎ町にあり、豊かな自然に囲まれた全校生徒68名の小規模校である。生徒は礼儀正しく、清掃活動やボランティア活動にも積極的に取り組むことができ、落ち着いた生活態度で学校生活を送っている。しかし、中には、コロナ禍の影響を含む様々な要因により不登校傾向の生徒もいる。また、これまで人権学習に取り組んできた結果、生徒の人権意識は確実に高まってきているが、人権学習で学んだことを自分自身の問題と捉えきれていないため、日常の身の回りにある問題に気付けず、自分や周りの人の人権を大切にできない場面も見られるため、一人一人が多様性を認め合い、尊重し合えるように取組を進めてきた。

２　研究主題

＜文部科学省指定研究＞
「多様性を認め合い、つながりを実感する人権教育の推進」

＜徳島県中学校人権教育研究会＞
「人権尊重社会の実現を図るために、差別の現実から深く学び、
すべての子どもの自己実現と共生・共存をめざす教育を確立しよう」
～人権意識の高揚を図り、同和問題をはじめ様々な人権問題解決への
意欲と実践力をもった生徒を育てるための教育を実践しよう～

３　研究主題を設定した理由

つるぎ町の課題として、安全・安心な暮らしやすい町づくりを妨げる過疎化の問題がある。生産年齢人口は全国平均を下回り、老年人口は全国平均を大きく上回っている超高齢社会の地域である。このような危機的な状況の対応策として、外国人の就労が増え、多様な人と共存していく社会になっていくことが予想される。外国に行かなくてもグローバルな社会は身近なものとなり、次代を担う子どもたちは、多様な人々と一緒に生活していく機会が増えるのではないか。すなわち、SDGs(持続可能な開発目標)が掲げている17の国際目標は、世界全体の目標であると同時に、つるぎ町に住む生徒自身の目標でもある。その中に含まれる人権課題を自分自身と結び付けて考えさせることにより、自尊感情を高め、多様性を認め合い、周りの人とつながり、生活していける社会を築き上げる力を養いたい。

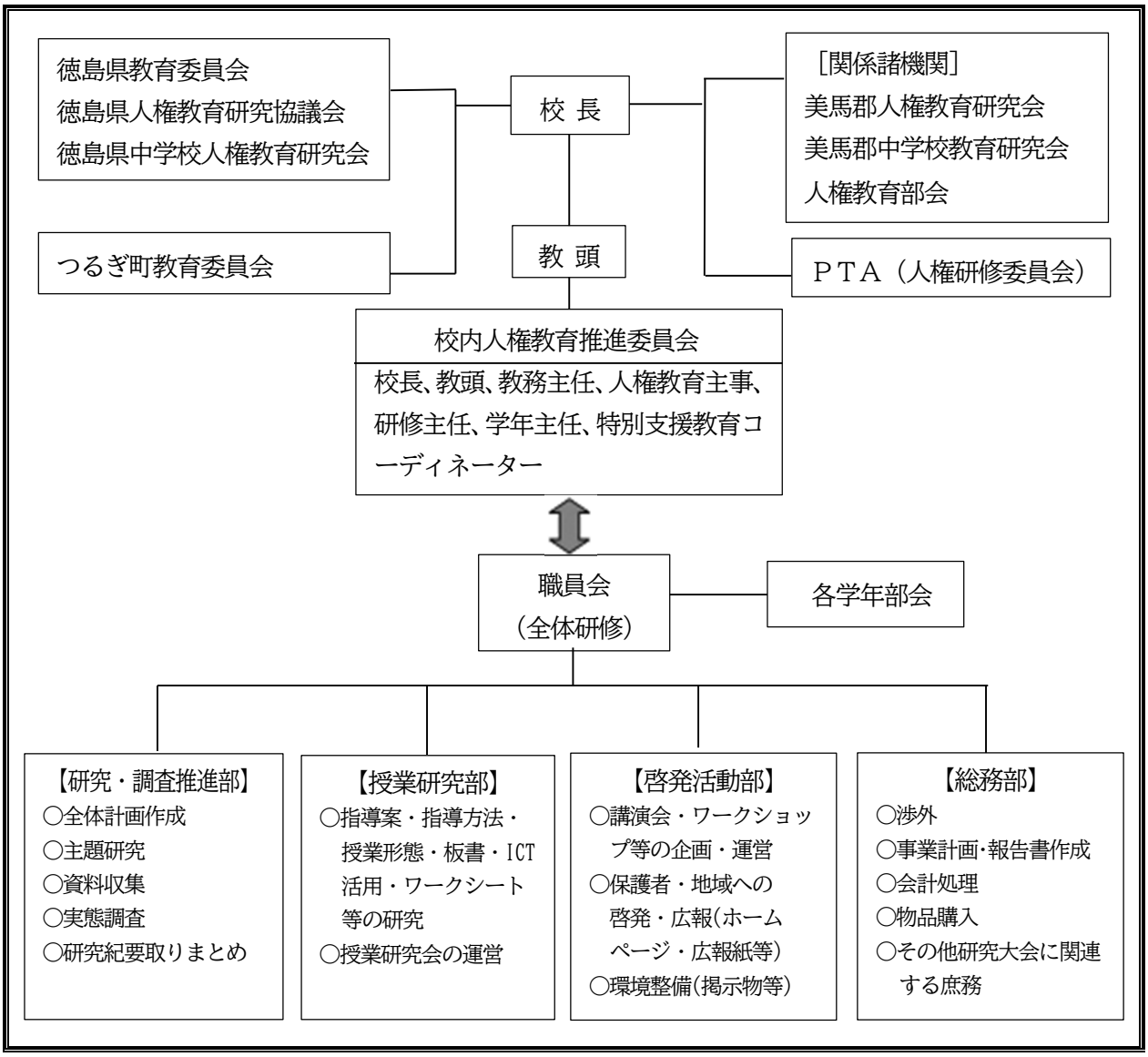
更に、同和問題は多くの人々の努力によって解決に向けて進んでいるが、インターネット上には差別的な書き込みが後を絶たず、以前よりも差別が見えにくいものになっている。将来、生徒が同和問題と直接出あった時、もしくはすでにインターネット上で出あっているかもしれない同和問題に対し、正しく判断し行動できるようにするためには、同和問題に対する正しい知識と、誰にとっても自分自身の問題であるという認識をもち、この問題の解決に向けて取り組んでいくことは、自分や自分の大切な人の幸せな生き方につながることを理解させる必要があると考えている。

そのために、SDGsなどの視点から、自分自身と周りの人の違いを認め、大切にできる知識を身に付け、学んだことを行動に結び付けることができる実践的な人権教育を推進していきたい。

そして、人権問題を自分の問題として考え、あらゆる差別をなくし、SDGsの前文にあるよう

に、「誰一人取り残さない」「すべての人々の人権を実現する」社会をつくっていくために、自分にできることを考え、行動できる生徒を育成していきたいと考え、本研究主題を設定した。

４　調査研究の組織



５　調査研究の内容

人権学習で学んだことを自分自身の問題と捉えさせることにより、自分や周りの人の人権を大切にできる実践力が育つと考える。また、つるぎ町の抱える問題をSDGsの視点から考えてみると、共通点がたくさんあることが確認できる。そして、生徒への生活アンケートの結果からは、自尊感情が低く、自分に自信をもてない生徒が多いことも明らかになっている。

そこで、次の３点を柱として研究を進めることとした。

① 体験的な学習を重視した人権学習の研究
② SDGsの視点からの人権学習の推進
③ 人権が尊重される環境づくり

６　調査研究の実施方法と検証・評価・普及

（１）実施方法

①　体験的な学習を重視した人権学習の研究

・人権問題の当事者と直接またはオンラインを通して出会う機会を設定することにより、差別の不当性を理解し、人権問題を自分の問題と捉え差別をなくしていこうとする意欲を高め、行動に結び付けることができる実践的な人権教育を進めていく。

・１学年の「ジュニアボランティア寺子屋」の取組の中では、障がいがある人や高齢者の気持ちに寄り添い、体験型学習活動を通して自分にできることを考えさせ、タブレットを使用したまとめ学習をホームページに公開する。また、高齢者施設の訪問や疑似体験等を通して、高齢者の立場に立って考えることを学ぶ。

・２学年の「防災学習」では、リモートによる被災体験者の講演会を実施し、すべての人の命を守る視点から災害時における人権問題について考えさせることにより、すべての人が大切にされるべき存在であることを確認させる。また、「イタリアとの交流」を通して、インクルーシブ教育についてのイタリアの現状を知り、日本の特別支援教育との比較により、それぞれのメリットについて学ぶ。

・３学年では、県内の識字学級を訪問し、識字学級生と交流する中で、厳しい差別の現実を知るとともに、前向きに学ぶ姿からうつくしい生き方を学ぶ。その学びを、タブレットでまとめたり、校内人権講演会で発表したりした内容をホームページに公開する。また、結婚差別について当事者の方から体験を含めた話を聞き、自分自身の生き方について考えさせる。

②　SDGsの視点から、「誰一人取り残さない」「すべての人々の人権を実現する」社会とするための理念についての学習の研究

・多様性を認め合い、自分の周りの人とつながり、自分の大切さとともに他の人の大切さを認める態度を養う。

・ジェンダーについて理解を深める。

・LGBTQ+についての学習を進める。

・平和な世界の実現のため、自分や他の人の命の大切さについて考えさせる。

・不平等や差別をなくすために行動していくための実践力を養う。

・つるぎ町で生活している自分たちの抱える問題について知り、その問題はSDGsの掲げる17の国際目標と重なる部分が多く、自分の身近な問題であるということに気付かせる。

・世界が抱える問題と自分が抱える問題が共通していることから、世界と自分とのつながりを実感させる。

③　人権が尊重される環境づくりの研究

・教室環境、掲示物など、人権に配慮した環境づくりを進める。

・ICTを効果的に活用した学習を進める。

・人権教育に関する情報、人権学習の取組についての情報交換を密にする。

・教職員の人権意識を高め、人権学習の指導力を向上させる効果的な研修を進める。

・学校独自の各種表彰などで、生徒の活躍を賞賛し、自尊感情を向上させる。

・朝の清掃ボランティアや各委員会活動・係活動などで、成就感や自己有用感を高める。

・常に教職員がポジティブな行動支援（PBS）を意識して指導にあたり、望ましい行動に対する称賛や承認を通して、主体的に適切な行動ができる力を身に付けさせる。

（２）検証・評価・普及

① 検証・評価

・学校評価アンケート、全国学力学習状況調査（質問紙）、Q-Uテスト、単元前後のアンケート（測定指標）の実施結果などから生徒の意識の変容を検証し、自尊感情、自己有用感、人権意識、人権感覚などについて評価を行う。

・「生活記録」の日記や、人権学習のワークシート、学習時の発表の状況、人権講演会の感想文、学校生活の様子などから、生徒の考えや態度の変容を検証する。

② 普及

・研究授業後の授業研究会で教職員相互の授業評価を積極的に行い、授業改善につなげる。

・事業実施による成果、課題、取組の様子、生徒の感想などを学年通信、ホームページなどから保護者や地域へ発信し、啓発していく。

・学校の人権学習で学んだことを、生徒自ら家族に伝え、保護者が人権について考える機会を設けるとともに、保護者の感想や意見を人権フォーラム新聞として発信・共有する。

７ 令和５年度の研究過程

時 期	内 容	備 考
４月３日	校内人権教育推進委員会①	教職員９名
４月４日	校内研修（人権教育年間計画の作成と共通理解）	教職員14名
４月27日	人権に関するアンケートの実施（事前）	全生徒
５月８日	美馬地区中学校教育研究会	教職員14名
５月18日	校内研修（人権教育の進め方）	教職員14名
５月22日	校内研修（指導案の作成方法　講師：田中貴之統括指導主事）	教職員14名
５月25日	Q-Uテストの実施	１学年生徒・教職員
６月１日	県内識字学級訪問（３年）	３学年生徒・教職員
６月12日	第１回イタリア交流会（２年）	２学年生徒・教職員
６月16日	人権講演会（障がい者の人権について　講師：松野一郎さん）	１学年生徒・教職員
６月19日	人権講演会（インターネットによる人権侵害について　講師：湯浅眞典さん）	３学年生徒・教職員
６月20日	人権講演会（特別支援教育　障がい児・者の人権について　講師：川田人包さん）	２学年生徒・教職員
６月21日	第２回イタリア交流会（２年）	２学年生徒・教職員
６月29日	第３回イタリア交流会（２年）	２学年生徒・教職員
６月29日	研究授業（３年）・授業研究会（講師：徳山富子人権教育指導員）	全教職員
６月30日	研究授業（１年）・授業研究会（講師：野上昌志指導主事）	全教職員
７月７日	研究授業（２年）・授業研究会（講師：野上昌志指導主事）	全教職員
７月10～14日	人権作文の作成	全生徒・教職員
７月12～13日	四国地区人権教育研究大会参加	教職員２名
７月13日	車いす体験	１学年生徒・教職員

７月19日	校内人権問題意見発表会	全生徒・教職員
８月２日	高齢者施設ふれあい体験（コンフォール貞光）	1学年生徒・教職員
８月４日	体験的参加型研修“あわ”じんけん講座参加（県立総合教育センター）	教職員１名
８月18日	郡教育会研修（フィールドワーク：大阪コリアタウン）	教職員12名
８月22日	中人研大会指導案検討会	教職員14名
８月30日	第１回県人権教育研究推進事業連絡協議会（オンライン）	教職員２名
９月６日	校内人権教育推進委員会②（研究紀要・大会要項作成について）	教職員６名
９月14日	人権講演会(性の多様性について　講師：葛西真記子さん)	全生徒・教職員
９月14日	学校評価アンケート(前期)	全生徒・教職員
９月15日	人権に関するアンケートの実施（事後）	全生徒
９月20日	認知症サポーター養成講座・高齢者疑似体験・講演	1学年生徒・教職員
9月19～20日	SDGs講話（永尾修一校長）	各学年生徒・教職員
９月21日	校内人権教育推進委員会③（アンケート結果分析と課題把握）	教職員14名
９月27日	手話サークル交流会	1･2学年生徒･教職員
10月３日	県立障がい者交流プラザ訪問・講演会	2学年生徒・教職員
10月３日	中人研大会運営委員会	教職員14名
10月５日	県立防災センター訪問	2学年生徒・教職員
10月５日	研究授業（１年）・授業研究会（講師：野上昌志指導主事）	全教職員
10月10日	人権講演会(結婚差別について　講師：中原サヲ江さん)	3学年生徒・教職員
10月11日	県人権教育研究大会参加	教職員１名
10月16日	研究授業（３年）・授業研究会（講師:徳山富子人権教育指導員）	全教職員
10月18日	研究授業（２年）・授業研究会（講師：長町真一朗班長）	全教職員
11月８日	文部科学省指定人権教育研究発表会（貞光中学校）	全生徒・教職員 県内中学校等 参加者約200名
11月25日	地域防災訓練	全生徒・教職員
12月	校内人権教育推進委員会④（研究成果と課題の分析）	教職員９名
令和６年 １月	校内人権教育推進委員会⑤（研究報告書の作成） 学校評価アンケート	教職員９名 全生徒・教職員
２月	部落解放・人権徳島地方研究集会参加 人権に関するアンケートの実施 第２回県人権教育研究推進事業連絡協議会（オンライン）	教職員１名 全生徒 教職員１名
３月	校内人権教育推進委員会⑥（年間指導計画の見直し・作成） 学校評価アンケートの考察と公表 校内研修（取組の振り返りと次年度の計画）	教職員９名 教職員14名 教職員14名

Ⅱ　具体的な取組

１　学校全体の取組

（１）人権教育講演会

①　在日コリアンについて

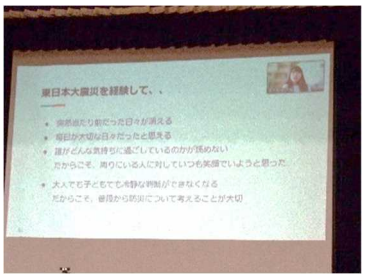
令和４年６月に徳島県人権教育指導員の冨田真由美さんをお招きし、校内人権講演会を行った。冨田さんからは、在日コリアンについての歴史や、在日コリアンの人たちに対する偏見や差別についてお話いただいた。また、桃太郎の鬼退治の話を動画で見せていただき、人々を守るために戦った桃太郎も、立場を変えて、鬼たちから見れば人権を奪う側になると、自分や相手の人権を守ることの大切さについて教えていただいた。

冨田真由美さんによる講演

＜生徒の感想＞
- 在日コリアンの人たちのことは、勉強して初めて知った。冨田さんのお話を聞いて、在日コリアンの人たちは何も悪くないのに、差別したらいけないと思う。
- 勝手に日本に連れて来られた在日コリアンの人たちが、差別されたり、偏見をもたれたりするのは、おかしい。今日聞いた話は、家の人にも話したいし、たくさんの人に広げていきたい。
- 今まで桃太郎は悪い鬼を退治したと思っていたけれど、何もしていない鬼を殺して、鬼たちの命や人権を奪ったのかもしれないと分かり、考えが変わった。相手の気持ちを考えることや、相手のことを考えて行動するのは大事だと思う。

②　リモート防災講演会

令和４年11月の地域防災訓練で、岩手県大槌町在住の高木桜子さんを講師に、「東日本大震災を経験して」と題して、リモートで校内人権講演会を開催した。津波で大切な人を亡くした経験から、「今一緒に過ごしている友人・家族を大切に。自分の住む場所の景色を大切に。」というメッセージをいただき、「当たり前の毎日を大切にしてほしい。」、「周囲の人たちを大切に生きていってほしい。」と語ってくださった。



高木桜子さんによる講演（リモート）

＜生徒の感想＞
・高木さんがおっしゃっていた、「津波や災害が起こっても、戻らない」ということは、命を守るために大切だと思った。
・地震がどれだけ恐ろしいものなのか知ることができた。同級生の２人が亡くなったと聞いた時、自分のクラスの人が２人いなくなると考えたらすごく悲しかった。
・いつどんな時に災害が来るかなど分からないので、高木さんに教えてもらったように、もっと周りの人を大切にしていきたい。
・地震は悲惨なことだけれど、苦しいことは地震や津波だけではないことも知った。それは避難所での生活で、使えるスペースがあまりないことや、プライバシー、自分の個人用のスペースがないことなどがある。
・高木さんのお話で、何気ない日常が大切だということに気が付いた。大槌町が、津波に飲まれる動画を見て思った。

③　１，２年人権講演会

令和４年11月盲導犬ユーザーの向井健市さんが、盲導犬エヴァンくんと一緒に来校してくださり、１，２年生対象の人権講演会を開催した。向井さんの目が見えにくくなり始めたころから、徳島でエヴァンくんと暮らすようになるまでのお話や、エヴァンくんとの生活の様子についてお話してくださった。また、盲導犬クイズでは、盲導犬と出会った時の注意点についても教えてくださった。

盲導犬ユーザーの向井健市さんと盲導犬エヴァンくんによる講演

＜生徒の感想＞
・盲導犬クイズで、盲導犬が仕事をしている時は、話しかけたり、なでたりしたらいけないということを教えてもらった。町で出合ったら、そっと見守って、私にできることをしたい。
・向井さんが話をしている間、エヴァンくんが静かに待っていて、とても賢いと思った。法律で、盲導犬はどの店にも入れると決まっているのに、エヴァンくんと一緒だと店に入るのを断られた所もあると言っていたので、もっとみんなが盲導犬のことを知らなければいけないと思う。
・盲導犬を１頭育てるのに500万円以上のお金がかかると聞いてびっくりした。そのお金は、全部、募金したお金が使われているので、私も募金したい。
・向井さんは、目がだんだん見えなくなっていって大変だったと思うのに、たくさんの人の健康のことを考えて仕事をしているのはすごい。

④　校内人権講演会

令和４年11月の校内人権講演会で、フリーライターの角岡伸彦さんを講師に、同和問題についてお話していただいた。部落史、これからの問題などについて、角岡さんご自身が体験されたことや、サイボシの試食を交えながら、わかりやすくお話してくださった。講演の最後に、生徒たちには、「同和問題関係者として、同和問題を自分の問題であるととらえてほしい」と語ってくださった。

角岡伸彦さんによる講演

サイボシの試食

＜生徒の感想＞

・初めて食べたサイボシは、とてもおいしかった。被差別部落にはこんなおいしいものがあって、すごいと思う。このことを、たくさんの人に知ってほしい。

・いまだに差別が残っている。今日聞いた話を、自分の家族に話して、もっと広げていったら、差別をなくせると思う。

・サイボシはとてもおいしかった。被差別部落には、サイボシや太鼓づくりなどのすばらしい文化があるのに、偏見をもったり、差別したりするのはおかしい。

・角岡さんが姪に書いた手紙の中で、角岡さんのお兄さんが、結婚差別のために婚約者と結婚できなかったと言っていた。でも、本当に理解してくれる人、差別しない人と出会って結婚して、幸せになってよかったと思った。

⑤　LGBTQ＋について

令和５年９月の校内人権講演会で、鳴門教育大学大学院教授の葛西真記子さんとSAG徳島のメンバーの方を講師に、「性の多様性について」という演題でLGBTQ＋についてお話していただいた。前半は、性の多様性や各国の実情及び日本の現状などをわかりやすく説明してくださった。後半には、SAG徳島のメンバーである当事者から、中学時代の制服やトイレの使用、名前の呼び方など、何に困り何に辛い思いをしたかの実体験を話してくださった。講演の最後には、生徒たちに、「区別の中に差別はないかを考えてほしい。」と語ってくださった。

葛西真記子さんと SAG 徳島のメンバーの方による講演

＜生徒の感想＞

・私たちの周りにも、約10人に１人が性別について悩んでいることを知り、私もその人たちに寄り添っていけるような存在になりたいと感じました。名前の呼び方など、少しの事でも大きな差別につながって、相手を傷付けたりすると聞いて、身近な人達にも差別につながる言葉や行動には十分に気を付けようと強く思いました。

・講演を聞いて、まず第一に「いろいろな性別、個性があっていいんだ。あるのが当たり前なんだ」と思いました。当事者の方が悩んで苦しかったことを私たちに教えてくれて、とてもありがたいと思いました。この学習を生かして、差別で苦しむ人達を守れるような人になっていきたいと思いました。

・私はLGBTQ+の人がいたら、正直、ちょっと変な目で見てしまうと思います。そして、もし誰かに打ち明けられたら、ちょっと困ってしまうと思います。そう思っている人は、他にもいるかもしれません。だから、日本は（LGBTQ+に対する理解が）遅れているんだと思いました。これから学習をもっと深めていこうと思います。

・私は身近にLGBTQ+の方が存在するとは思わず生活していました。でも、話を聞いてまわりには言いたくても言えない人がいるのかなと思いました。もし、自分の友達が相談してくれたら、びっくりすると思いますが、私を信頼して言ってくれたと思うので、それに応えられる人間になりたいです。

・日常生活で何気なく言っている「～君」「～ちゃん」を「～さん」にしたり、何て呼ばれたいか聞いてみることもしたいです。また、「好きな男子（女子）おる？」ではなく、「好きな人おる？」という聞き方をしようと思いました。自分が無意識に差別しているかもしれないということを意識しておきたいです。

・悪気のない「区別」の中に、人を傷付けてしまう「差別」が存在しているということに、私は驚きながら納得もしました。また、性に違和感をもっている人がいたら、安心して自分の気持ちを打ち明けてもらえるような人になりたいです。そのために、自分から自分のことを話していこうと思います。

・いろんな生き方があるように、いろんな性があっていいと思います。みんなが自分らしく生きるためには、周りの環境が大切なのだと思いました。性の多様性が尊重される社会にしていくのは、私たちなんだと思います。

（２）生徒会活動における取組

①　校内人権問題意見発表会・人権集会（人権広報委員会）

全校生徒が、人権学習で学んだことや、自分自身の体験、校内人権講演会の感想をもとに人権作文を書き、各学年２名の代表者を選出し、人権問題意見発表会で発表している。その後、人権広報委員の進行で、代表者の意見発表を聞いて心に残ったことや、自分たちの生活を振り返って、思ったことをもとに全校生徒で話し合う人権集会の時間をもっている。積極的に全校生徒の前で意見を発表することが、その後の学級での人権学習につながっていると感じる。また、令和３年度からは保護者の参加も再開し、保護者の啓発につながっている。令和５年度は人権集会を参観日とし、保護者の参加も約３割と増加した。意見交換の時間には、生徒だけでなく、保護者や教員からの発言もあり、生徒・保護者・教員でともに考える貴重な時間となり、さらに家庭への啓発が広まっている。集会の最後には、人権広報委員会で作成し、生徒全員に承認された「貞光中学校人権宣言」を会場にいる全員が声を合わせて朗読した。人権問題解決に向けて、貞光中学校一丸となって取り組

んでいこうとする決意を新たにした。生徒たちはそれぞれの学年の学びを全校生徒や保護者に広げるだけでなく、参加者の意見を聞くことで、それぞれの人権を大切にし、自分たちが作成した「人権宣言」を守っていこうとする意欲の高まりが見られた。また、人権広報委員も、大きな行事を通して自分たちで作成した人権宣言が承認され発表できたことが成功体験として残り、自尊感情が高まったようである。

令和４年度の校内人権問題意見発表会・人権集会

令和５年度の校内人権問題意見発表会

令和５年度の人権集会

＜人権集会の中での生徒の意見より＞
- 自分にも差別する心があったことを思い知らされた。これからは、お互いの心を知ろうとする気持ちを大事にしたい。
- これからも正しい知識を身に付けていき、人権学習の度に更新していきたい。
- 周りの人の意見に流されることがあり、人を傷付けてしまったことがあるから、まずは自分の周りの人を大切にしていきたい。
- 自分の心の中と向き合って考えていくことが大事。今日の人権集会は自分と向き合うよい機会となった。
- 差別をなくすために、勝手な思い込みや、心の壁をつくらないようにすることが大切。
- 人の短所ばかりを見つけるのではなく、その人の長所をどんどん探していきたい。
- 差別は他人事ではなく、自分の身の回りにあるので、これからしっかり考えていきたい。
- 「差別をなくす仲間」の一員として、これからも人権学習に取り組んでいきたい。
- いろんな人の発表を聞いて、自分の考えを改めなければいけないと思った。
- お互いのことを認め合うことが、差別をなくすきっかけになるということがわかった。

貞光中学校人権宣言

前文　私たち貞光中学校生徒は、
『互いを思いやり、優しさと笑顔が溢れる学校』、
『誰一人取り残すことなく、個性が花開く学校』、
『夢に向かって一歩一歩前進できる学校』
をめざし、ともに学び、ともに支え合うかけがえのない仲間と
素晴らしい学校づくりを行うことを宣言します。

第1条　私たちは、いじめをしない・させない・見逃さない学校をつくります。

第2条　私たちは、互いの良いところを見つけて伝え合い、個性を尊重します。

第3条　私たちは、自分の言葉や行動に責任をもち、互いの信頼関係を築きます。

第4条　私たちは、互いの夢を応援し合い、ともに努力を惜しまない生活をします。

第5条　私たちは、すべての人の人権を大切にできるように行動します。

令和5年7月19日　人権・広報委員会

人権・広報委員会が作成し、人権集会で全校生徒に承認された「貞光中学校人権宣言」

＜人権問題意見発表会・人権集会後の生徒の感想＞

・各学年それぞれの意見を聞くことで、自分の人権感覚をより磨き、自分の中で答えを見つけることができ、自分自身が成長することができたと思いました。人の意見を聞いて考え続けていくことが、差別をなくしていくことにつながると思いました。それでも残ってしまう差別は一人一人が考え、人権感覚を磨き続けることが必要だと思いました。

・「違い」を「個性」として捉えるという表現を聞いて、私自身周りの人と違うところや変わっているところをネガティブに捉えていたので、そうではなく自分の個性としてポジティブに見ることができるようになりたいと思いました。

・一人一人違うのが人間だと思いました。多様性を大切にした社会をつくっていくには、心の壁を取り除かないといけない、そして、お互いを認め合える空気感を作りたいと思いました。

・「寝た子はネットで起こされる」という言葉を初めて知りました。私たちの生活の中にある差別に気がつくことが大切だと思いました。特に、インターネットや SNS での情報を鵜呑みにしないで自分で考えられる人権感覚を身に付けておきたいと思いました。

・私は今日クラスの代表として発表をさせていただきました。自分が発表しながら、自分の事を振り返ることができ、他の人の意見を聞いて考えを深めることができました。発表会後の集会では、「いろんな人の発表を聞いて、自分の考えを改めなければいけない」と思った人、「自分の心の中に差別心があることに気が付いた」という人、自分の決意表明をする人など、一人一人が自分の心と向き合ってそれをみんなの前で発表していたので素晴らしいと思いました。

・いろんな人がいて、いろんな生き方があっていいと思いました。その中で、差別意識や偏見をもたないようにしないといけないと思いました。今日の学習を通して、周りの人や家族に人権について思うことをもっと伝えていきたいです。

・誰が何を思い、どう考えているのか普段の生活では見えないことわからないことがたくさんありますが、こうして意見を聞いてみんなで考えることができるのは、とても素晴らしいことだと思いました。人の事を知るにはコミュニケーションを取ることが大切だと思いました。あいさつも恥ずかしがらずに自分からできるようにしたいと思いました。

・私も今まで人権学習をしていましたが、想像もできないような意見がたくさんありました。人には人それぞれの意見があり、誰一人として同じ意見や考えの人はいないんだと気付かされました。その考えが広まると、差別や偏見も減っていくと思います。そして、差別や人権問題を「自分事」として捉え、差別をしない、させない、見逃さないようにして、本当に平和な社会をめざしていきたいです。

②　自主勉強表彰など（学習委員会）

学習委員会では、「自主勉強ノートのチェック・優秀ノートの掲示・表彰」、「学習プリントの補充・整理」を主な活動内容としている。各クラスの自主勉強ノートを持ち寄り、他学年のノートをチェックし、優秀者を選んでいる。

付箋にコメントを記入

優秀者を集会で表彰

掲示してみんなが参考に

優秀者の自主勉強は「暗記型」「整理・分析型」「実践・振り返り型」に分類し、どこがすばらしいのか付箋にコメントを書いて貼り、廊下に掲示したり、集会で表彰したりと、称賛の機会を設けている。

また、自主勉強ノートは毎日担任がチェックし、ノートが一定数以上仕上がると、生徒自ら学校長に提出するようにしている。生徒が、職員室の学校長のところに提出に来ると、職員室中の教職員に披露し、みんなで拍手をして称賛している。そして、学校長が最後のページにコメントを書いて返却するとともに、次の新しいノートを渡して激励している。生徒自身に「やればできる」という達成感を感じさせる場面を増やすことが、自己肯定感の高まりにつながっているのではないかと考える。

③　清掃活動など（環境美化委員会）

環境美化委員会では「誰が見てもきれいな学校にする」ことを年間目標にしている。その一環として環境美化委員が中心となり、毎週月・水・金曜日に玄関の清掃活動を行っている。朝の10分間、参加者はモップなどで手際よく清掃に取り組んでいて、進んで校内を美しく保とうとする意欲が感じられる。また、活動日以外の火・木曜日には、委員会活動ではなく、数人の生徒が奉仕活動として自主的に清掃に取り組んでいる。その他の生徒もできるだけ玄関を美しく保てるように協力できており、生徒全員が毎日気持ちよく過ごせるように美しくしようとする態度が養われている。

朝の清掃活動

④　あいさつ運動・のぼり（生徒会本部）

本校では、生徒会メンバーによるあいさつ運動を行っている。毎週金曜日の７時30分から７時50分まで、正面玄関前に立ち、登校してくる生徒にあいさつをしている。生徒会が自主的に行っており、率先してあいさつをする活動を続けてきたことで、本校では自らあいさつをすることができる生徒が多くなりつつある。

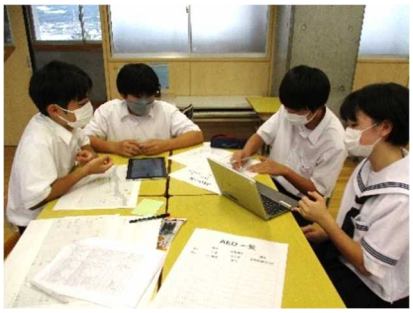
生徒会メンバーによるオリジナルのぼりを持ってのあいさつ運動

持っているのぼりに書かれている言葉は作成当時の在校生から募集した標語から選ばれたものであり、集まった標語を元にいじめ防止委員会を兼ねている生徒会役員が中心となり作成した。のぼりは代々生徒会で受け継がれており、あいさつ運動を行う日は正門横に、それ以外の日や悪天候の日は、校舎内の階段に立てかけられている。のぼりの標語は、「さわやかに 交わすあいさつ 輝く笑顔」、「『見てただけ。』 見ているあなたも いじめてる」というように、人と人とのつながりやいじめ防止を意識したものになっている。

⑤　一次救命処置や美馬地区 AED マップ作成について（保健給食委員会）

緊急時において、生徒が自他の命を守るために適切に判断し、行動する力を身に付けることを目的に、保健給食委員会が中心となり、一次救命処置に関する意識向上に向けた取組を行った。

地元消防署と連携し、一次救命処置やAEDの活用に関する動画を作成し、それらを保健給食委員が各クラスで発表した。また、保健給食委員会で貞光・一宇地区のAEDマップを作成し、他校で作成されたAEDマップと組み合わせ、美馬地区AEDマップを完成させた。更に、美馬地区全中学校の保健給食委員会と生徒会役員の代表が参加し、Web会議システムを用いて「美馬地区AEDマップ活用作戦会議」を行った。この会議では、各校で事前に話し合った活用方法や消防署への質問事項などを発表し合った。この会議を受け、美馬地区AEDマップ縮小版を全校生徒へ配布することに決定した。「わが家のAEDマップ」とし、QRコードを読み取ると美馬地区AEDマップが表示され、AED設置場所を検索することができる実用的なマップを生徒一人ずつに配布した。AEDマップを見た生徒たちより、「こんなにたくさんのAEDが設置されていて、いざという時に命を守るために重要なものであると改めて感じました。」などの感想を聞くことができた。



保健給食委員が AED マップを作成

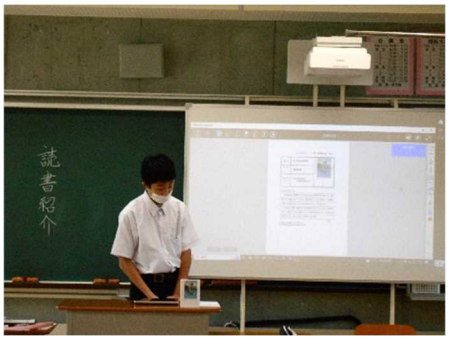
作成した各種 AED マップ

⑥　学級文庫・本の紹介など（図書委員会）

図書委員会の活動として、図書室の本を各学級に貸し出す学級文庫を設けている。生徒は自分の好きな本を選び、授業の合間や昼休みに読書することができている。

朝の自主学習では、毎週木曜日に読書の日を設定したり、学習活動の合間などを利用して読書活動を行ったりしている。国語の授業では、読書紹介をして互いに好みの本の紹介をして、本に親しむことができている。生徒は互いの本の好みや、興味を知ることができて、級友の違った面を発見することができている。

また、図書室にSDGsに関連した内容の本を購入し、各教科の授業に使ったり、総合的な学習の時間の調べ学習などに活用したりしている。生徒はSDGsについての知識を身に付けることで持続可能な社会の実現に向けて、何ができるか、主体的に考えることができるようになってきた。また様々な人権課題についても知識を深めている。地域との連携では、読み聞かせの絵本を地域に貸し出しをして、小学校での読み聞かせに活用している。



生徒による本の紹介

⑦　防災学習など（防災安全委員会）

近い将来、高確率で発生すると言われている南海トラフ巨大地震に備え、本校も防災・安全教育に力を入れ、毎年地域防災訓練に取り組んでいる。今年度は、防災・安全委員会が主体となって防災訓練の事前学習に取り組んだ。事前学習では、人権と防災のつながりに注目し、全校放送で防災訓練の意義や心構えなどを生徒が全校生徒に伝えた。その後、昭和南海地震を描いた視聴覚教材「シロのないた海」を視聴し、ICT機器を用いて意見共有した。生徒は災害時には社会の連帯と協力が不可欠であり、自らも共助の一役を担える存在になりたいと考えることができた。

校内ハザードマップの作成

委員による自転車点検

防災訓練について放送

また、生徒たち自らが安全な学校環境を築くために、校内ハザードマップの作成や、委員たちによる校内の安全点検、さらには自転車点検を実施している。この活動を通して、学校内に潜んでいる危険や安全上の課題を発見し、自他の命や人権を尊重することの重要性を再確認することができた。

（3）学力向上

① 前進タイム・表彰

本校では、毎朝「前進タイム」という朝学習の時間を設定している。週ごとに国・数・英の全教科の基礎学力の定着を図ることを目的とした復習プリント等の課題に取り組み、朝の時間を過ごしている。３教科の学習は月・水・金と週３日行っており、タブレット等も活用することがある。３回に１回は確認テストを行い、７割以上の合格を目標としている。学期末には３教科全ての小テストの80％程度以上で満点を取った生徒に「満点賞」を、前学期に比べて平均点が10点以上上がった生徒には「前進賞」を与え表彰している。合格できなかった生徒については各学年団で個別指導を行い、再テストを行っている。基礎・基本の学力の定着だけでなく、学習意欲が低い生徒や学習に対して苦手意識をもっている生徒に対しても達成感を味わわせることができ、学習に対する姿勢の見直しや学習意欲の向上につながっている。

「前進タイム」に取り組む様子

努力を表彰

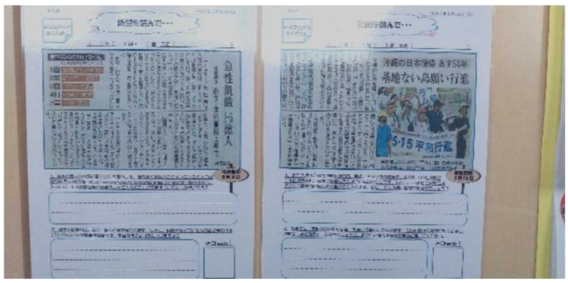
② 新聞記事・フォーラム

朝の学習である「前進タイム」では、毎週火曜日に新聞を活用して人権学習の時間を設けている。生徒たちが普段なかなか手に取ることのない新聞を読むことによって、文章を読み理解しようとする機会をもつことと、世の中の動きを知り、社会的な問題や時事問題について興味・関心を抱かせることを目的としている。また、今年度は全学年で人権について考える授業や活動が活発に行われていることもあり、様々な人権問題の観点からテーマを設定し学習を進めている。第１回から第６回までの第１クールは「平和な社会を築くために」というテーマをもとに、今世界で起きている戦争や紛争、飢餓や貧困などについての新聞記事を扱った。第７回から第12回までの第２クールでは「多様性を認め合うために」というテーマで、「LGBT理解増進法」についてのものやビューティージャパンに出場するつるぎ町の女性についての特集などの新聞記事を扱った。現在は、「子どもの権利を考える」というテーマで第３クールが進行中である。

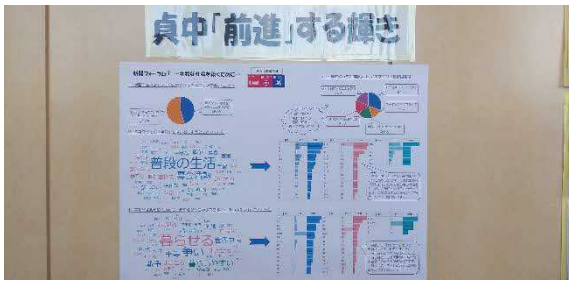
意見を書いた付箋を集約して掲示

各テーマのまとまりが終わるたびに生徒にアンケートを取り、特に印象に残った新聞記

事や自身の考えの変容、テーマに対する自分なりの考えなどを回答してもらっている。授業で学習したことと新聞記事の内容を結び付けて考える生徒も多く、様々な人権問題を自分事として捉え真剣に考えている生徒の姿が見て取れる。生徒のアンケート結果はまとめて廊下に掲示し、フィードバックできるようにしている。昨年度までは生徒の意見を付箋で集約し、それを直接掲示として貼りだしていた。今年度はタブレットの機能を活用してアンケートを取り、それをまとめたものを掲示している。タブレットを活用することで生徒の興味・関心がどのような内容に向いているのかデータ化することができている。加えて、様々な人権問題を生徒が考えるときに、どのような単語がキーワードとして挙がってきているのかを可視化することができたのも、大きな成果だといえる。



朝の学習で実施している新聞記事を活用した取組

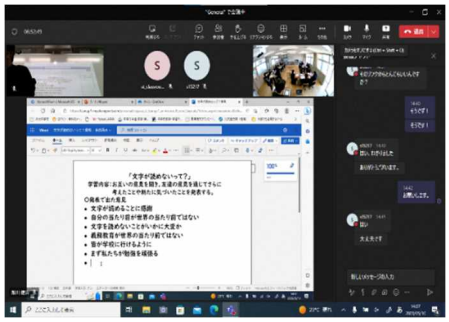


１クール毎にアンケート結果をまとめて掲示

（４）環境づくり

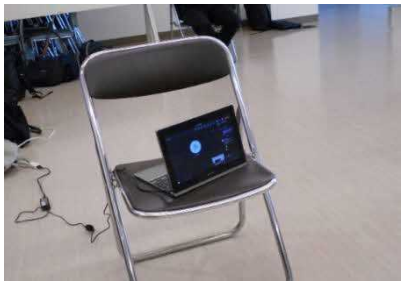
①　リモート配信・ＤＸ

学校で授業を受けられていない生徒に向けて、授業をリモートで配信している。ある生徒は、家庭でタブレットを使って受信し、授業を受けている。チャットなどでやりとりをして出欠確認をし、黒板の投影や画面共有を通して板書や教材の配信を行っている。また、授業支援アプリからワークシートを配信し、家庭からでも教室の生徒と同じ課題に取り組むことができる環境を整えている。



授業のリモート配信

３年生の１人は、タブレットとモバイルルーターを活用して、校外学習に家庭からリモートで参加し、他の生徒と同様に講演を聴くことができた。また、訪問先の様子をカメラを通して見ることができ、掲示物なども見学できた。タブレットを通してつながることで、生徒同士のやり取りも多くなり、離れていても良好な関係を少しずつ築くことができ始めた。

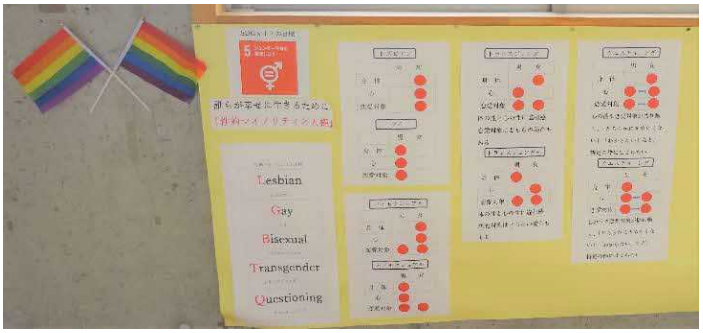


校外学習にリモートで参加

②　掲示物

人権学習や人権講演会で学習したこと・活動したことを、写真とともに生徒の感想を掲示し、学習を振り返らせるとともに、学習した内容が、以後の学習へつながるようにしている。また、掲示物には学習した内容がどの目標を達成するためのものか、SDGsの17の目標のアイコンを入れている。SDGsを自分たちの問題と捉え、「誰かがやってくれる」のではなく「自分たちがこれからの未来を変えていくんだ」という意識を生徒にもたせ、主体的に目標に向かって行動できるようにしている。

人権学習や人権講演会を振り返る掲示物



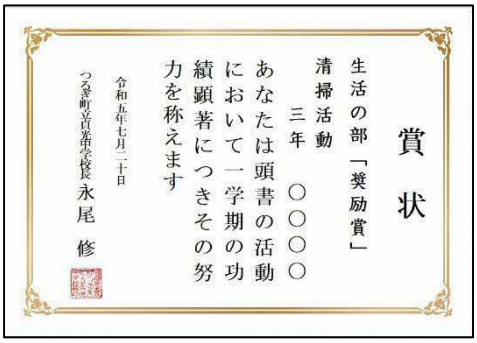
SDGsについて学び考えるための掲示物

③　ポジティブな行動支援

本校では、学期末表彰として「学習の部『優秀賞』」と「学習の部『努力賞』」を設けている。『努力賞』では定期テストでよく努力した生徒、実技教科・道徳科・特別活動・総合的な学習の時間について特に意欲的に取り組んでいる生徒が選出されている。該当学期に努力した成果をたたえることで、本人の自信につなげられるようにしている。また、「生活の部表彰」として、校内の清掃活動・給食活動・学級の係活動・実践委員会活動・生徒会活動等において他の模範となる活動を行った生徒、又は校外でボランティア活動、救助救命活動や防犯活動等を行った生徒が選出されている。その成果の一つとして、生徒は誰も見ていない時でも、進んで清掃に取り組むことができている。

また、職員室前のモニターでは、学校行事や部活動の写真を映し、活躍の様子を披露している。生徒は普段見られないほかの生徒の姿から多くのことを学び、また、生徒が努力した自分の姿を振り返るよい機会になっている。

10年程前までの本校はやや荒れた状況にあり、教職員の思いがなかなか生徒に伝わらない学校であった。そこで、教職員による継続的なポジティブな行動支援や前向きな声かけをスタートさせたが、時間の経過とともに、行動に自信をもち建設的な言動をとる生徒が増えはじめ、現在の落ち着いた学校につながった。今後も「〇〇してはいけない」ではなく、「〇〇した方がもっとよくなる」というような、生徒が前向きになれるポジティブな行動支援を、教職員全員で心がけていきたい。


賞状

生活の部「奨励賞」
清掃活動
三年　〇〇〇〇
あなたは頭書の活動において一学期の功績顕著につきその努力を称えます

令和五年七月二十日
つるぎ町立貞光中学校長　永尾　修

生徒の日頃の努力を表彰

生徒の頑張る姿を廊下で上映

（5）保護者・地域との連携

① 人権フォーラム新聞

生徒も保護者も教職員も一緒に学ぶ機会になるよう、「人権フォーラム新聞」を発行している。生徒は、人権学習後や人権講演会を聞いた後の感想を家庭に持ち帰り、その内容について家族と話し合い、保護者はその感想や話し合った内容をWebアンケートで答えたり付箋に書いたりして、学校に返信してくれる。保護者の意見や感想は人権フォーラム新聞に掲載して、生徒も教職員もさらに人権についての理解を深めている。また、生徒は自分から差別をなくすための第一歩として家族と話し合うことで、人権についての正しい知識を再確認でき、人権問題の解決に向けて身近な人に行動を起こすことができるようになってきている。

令和５年　月　日

保護者の皆様へ

人権講演会の感想について（お願い）

新涼の候、保護者の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申しあげます。日頃は本校教育のためにご支援・ご協力をいただきまして誠にありがとうございます。　　敬

さて、９月１４日（木）に鳴門教育大学大学院教授の蒔西真記子先生，ＳＡＧ徳島のメンバーの方を講師としてお招きして，『性の多様性について』という演題で講演をしていただきました。

そこで、保護者の皆様にも、お子様がその授業から何に気付き、何を学んだのかを知っていただき，ご家庭でも人権などに関するお話をしていただけたらと思います。今回は、授業後に書いたお子様の感想を持って帰らせますので、ぜひ，ご一読のうえ，その感想を１０月３日（火）までにお送りいただけましたら幸いです。お手数をおかけしますが，どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

なお、感想は次のＱＲコードかURLでネットを通じてお送りいただくか，同封している黄色の付せんにご記入の上，担任までご提出ください。また，いただきました感想は，「人権フォーラム新聞」や学校の掲示物等に無記名で使用させていただく場合もございますことを，どうぞご了承ください。

人権学習の感想について（お願い）

URL:https://forms.office.com/r/9kbaNQKf43

付　箋

保護者への案内（QR コードと付箋付き）

② 校内人権問題意見発表会・人権集会

７月19日の参観日に、校内人権問題意見発表会・人権集会が行われた。本校のPTA専門委員会には、「研修等を通じて、会員の人権意識を高めるとともに、教養を高めるための活動を行う」ことを目的とした人権研修委員会がある。人権集会に向けて、人権研修委員長を中心に各家庭に参加の呼びかけを行っていただき、多数の保護者が参加してくれた。人権集会では、生徒たちだけでなく、保護者も参加し、意見発表についての感想を述べたり質問をしたりと活発な意見交換が行われ、人権についての理解を深めることができた。

人権集会で発表する保護者

＜参加保護者の感想より＞

・今日は、初めて貞光中学校の人権集会に参加させていただきました。どの代表者の意見発表も、全部が素晴らしかったです。みんなが、人権のことをよく考えていて、中学生はすごいなあと思いました。よく勉強しているなあと思いました。今の気持ちを忘れずにもち続けて、大人になってもやさしい人になってもらいたいと思います。今日は、本当に来てよかったと思います。ありがとうございました。このような行事や機会を、これからも続けていってほしいと思います。

・１年生から３年生のそれぞれの人権学習の発表が聞けてよかったです。家庭では、なかなか話し合うことがないので、こういう機会があるのはありがたいです。「相手の気持ちを考えること」や「相手の短所ばかりを口にして、長所はほめない」、「全てを包み込む寛大な心」等、大人の私たちにささる言葉がありました。幼稚園や小学校で同じ教室で過ごすことは、本人にとっても周りの子どもたちにとってもいいことだと思います。小さな頃から関わっているとコミュニケーションの取り方を自然と学べているし、身に付いているだろうなあと思います。様々な差別があるので、身近なことから考えていきたいです。

・中学生としての考え、そして、これからの自分はどうあるべきかと、とてもすばらしい発表でした。私も学生の時は、学校で学び、考えることをしていたけれど、成長するほど、日々の忙しさを理由に人権について考えることから離れているように思います。この会をきっかけに子どもたちと話し、これからどうすべきなのかと時間をとりたいと思います。

・子どもたちが、学校で学んだ人権学習を家庭に持ち帰り、家族と話をすることによって、人権について考える時間をつくることができました。６名の方の考えや意見を聞くことで、またさらに、人権について学ぶことができ、今後私たちもコミュニケーションをとり、心に壁をつくらず、行動を起こすことで今までとは違った人間関係ができそうです。誰もが怖さはありますが、行動を起こしたいです。

・学年ごとに人権学習をして感じたこと、気付いたことがあり、それぞれの発表の中にこれからの自分の在り方を考えられていてたいへんよかったと思う。また、発表者以外の生徒も真剣に発表を聴いていてすばらしいと思った。障がいの有無にかかわらず、相手の意見や思いに耳を傾け、負のとらえ方ではなく、プラスのとらえ方ができるよう日々の生活の中でもよい人間関係を築いていってほしいと思う。根強く残る部落差別等についても学習を続け、知っていくことが大切であると改めて感じた。人の意見に流されないように･･･。惑わされないように･･･。
・「人は見た目で判断をしてはいけない。個性としてとらえて自分の中で偏見をもたない」それは、いろんな人権問題にもあり、間違ったとらえ方をしてしまう。人権・差別。世界にはたくさんの問題がありますが、日本においても部落差別が未だに解決に向けて進んでいないことを改めて思いました。自分自身も30年前位に教育を受けましたが、昔と変わっていないと感じました。そして今は、他の様々な差別があることや差別解消に向けて人権教育をしていることに改めて気付きました。今後も人権教育を進めてほしいと感じました。
・インクルーシブな世界になることを望んでいます。人のよいところを見つめ、それを伸ばしていける学習や人としての成長を見守る学校のあり方をみんなで考えていけたらと思います。子どもたちが夢をもって人と人との関わりに積極的に参加して、差別のないすばらしい未来になることを望んでいます。
・落ち着いて堂々と自分の考えを話されていた。日頃から人権学習に取り組んでいる姿を思い浮かべることができてたいへん感心した。話合いの時間では、はじめこそ遠慮がちだったが、多くの感想を聞くことができた。これからもこの発表会・集会を続けていって、人権意識の高い人間に育ってほしいと心から感じた。

③　一宇雨乞い踊り

本町の一宇地区には、江戸時代から伝わる伝統芸能「一宇雨乞い踊り」がある。幡（のぼり）、鉦、太鼓、ほら貝、笠、唄い手などで構成し、「呼べ飛べ龍王よ水たんもれ水神よ」との唄で踊る。現在は、徳島県の無形民俗文化財に指定されているが、神事としての風習が薄れた1920年頃に一端途絶えた。1968年にふるさとの伝統芸能を残そうと地元住民が保存会を結成して復活し、1991年からは一宇中学校の生徒も継承に加わった。一宇中学校が休校することになった2010年から、貞光中学校がこの活動を継承し、現在に至っている。

伝統文化「一宇雨乞い踊り」を学校祭で披露

本校では、一宇地区から通学する生徒だけでなく、生徒会役員や希望する生徒も加わり、「一宇雨乞い踊り」保存会の方にご指導いただきながら、「一宇雨乞い踊り」伝承部として活動しており、毎年、学校祭で発表している。活動してきた生徒は、「伝統をつなぐために学校のみんなに見てもらうのが大事。悔いのないよう、やりきりたい」「大切な伝統芸能文化が身近にあると実感できる」「町の若者が減る中、自分の地域の伝統を大事にしたい。この町が好きだから」「地元文化の経験自体が貴重だと思う」と満足したような表情を見せてくれる場面も多い。自分たちがふるさとのために重要な役割を担っていると自

覚し、一生懸命に練習して舞台で発表することで、自信をもつ生徒もたくさんいる。また、他の生徒もこの町に伝わる伝統芸能を観ることで、地域を誇りに思う心が育ってきているように感じる。今後も、本校で継承して後世に伝えていきたい。

④　地域防災訓練

本校では自他の命を守る防災学習に継続して取り組んでおり、令和４年度は徳島県の「まなぼうさい活動賞」を受賞した。地域防災のリーダーとして、毎年、２学年の生徒で防災クラブを結成している。令和５年度の結成式には、つるぎ町管理防災課の職員をお招きし、出前講座でタブレットを使って地域のハザードマップを調べたり、吉野川の堤防が決壊するシュミレーション動画で、自分たちの暮らしている町が洪水に飲み込まれていく様子を見たり、将来起こるかもしれない大災害の恐ろしさを実感した。

町職員の方による防災出前授業

令和４年度の地域防災訓練

県立西部防災館で災害時の人権をテーマとした学習

生徒が地域防災の担い手となるよう続けてきた地域防災訓練は、令和５年で７年目となる。つるぎ町役場管理防災課、つるぎ町教育委員会、美馬西部消防署、半田病院DMAT隊など、地域の方々の協力のもとに今年度は11月25日に実施する予定である。訓練では防災クラブ員の２年生が、様々な場面でリーダーとして活躍する。保護者や域住民の方にも参加していただき、共に様々な訓練を行い、地域の防災力向上をめざす。

昨年、防災学習の一環として２学年で行った校外学習では県立西部防災館を訪れた。「災害時の人権問題」をテーマとした学習に取り組み、「災害と人権」「トルコとの絆」「クロスロード」の３つの講座を受講した。昼食は、防災食のアルファ米、レトルトカレー、カンパンを試食した。また、当日は、家庭科の学習で作成した防災リュックに、防災食など校外学習に必要な物を入れ、各自が持参した。その後、防災リュックは家庭に持ち帰って防災グッズを入れ、災害時に備えることとした。今年度は10月５日に徳島県立防災センターにて地震体験、消火体験、煙体験、風雨体験を実施した。

⑤　読み聞かせ（たまゆらの会）

本校では、朝の自主学習の時間を利用して月２回、地域の「たまゆらの会」の方をお招きして、絵本の読み聞かせをしていただいている。以前は、図書室を地域に開放し、地域との連携を図っていた。読み聞かせをしていただいている時、生徒は絵本の世界に引き込まれ、心が安らぐ時間となっている。

生徒は各学年ともに真剣に聞き入り、物語を自分自身の生活と照らし合わせて、学校生活の変容につなげることができている。朝の読み聞かせをすることで、落ち着いて学校生活をスタートさせることができており、優しく級友に声かけをすることができるなど、人権意識の高まりが見られている。

たまゆらの会のみなさんによる読み聞かせ

（６）職員研修

①　自尊感情を高める研修

本校生徒の一番大きな教育課題は、自尊感情が低いことである。（自尊感情の低さは、学校アンケートやHyper-QU、徳島県学力ステップアップテスト、全国学力学習状況調査などから明らかになっている。）そのため、生徒の自尊感情を高める取組が、今回の研究の柱になる。そこで、令和５年４月４日に新組織のメンバーで、「生徒の自尊感情を高めるために」という内容で、ワークショップ形式の職員研修を行った。昨年度末に「学習」「生活」「自治」の３つの内容について、教職員から出された生徒のよさと課題を提示した。その課題に対する改善策として、また、生徒の自尊感情を高める取組を取り入れることを目的として、各グループで意見を出し合った。それぞれのグループから出された改善策を教職員全員で共有し、教育活動全体において、自尊感情を高める取組を柱に人権教育を推進することへの合意が図られた。

＜自尊感情を高める取組ワークショップの内容について＞

項　目	改 善 点	アイディア
学　習	授業改善	○面白い授業・興味をひく仕掛け・言語活動の充実 ○教師主導から課題解決学習の取組へ ○実生活と結び付ける ○聞く・話す、１分で発表させる
	ICT(DX)の積極的な活用	○ICTの活用 ○発表が苦手な生徒のために、ICTを使って意見を拾う（リモート授業を受けている生徒の意見も拾う）
	読書	○読書カード、読書時間の確保、本との出合い
	仲間づくり	○固定化された人間関係のグループではなく、それぞれのクラスメートのよさを感じさせるグループづくり ○グループで消極的な生徒が積極的になる状況をつくる ○聞く→仲間の意見に興味・関心をもって一生懸命に聞く助け合う、手伝う雰囲気をつくり上げる
	家庭学習の充実	○家庭学習時間を客観的に知る ○毎日の生活の過ごし方の見直し
		★教員と生徒でつくり上げる授業 ★ICTの活用 ★成功体験を積ませる（可視化する）
生 活	あいさつ	○あいさつのよさや素晴らしさを伝える ○継続と習慣化を図る ○周りの誰もがあいさつを当たり前にする環境づくり コミュニケーションのよさを感じさせる
	暴言・悪口 仲間づくり	○教職員や保護者が優しく温かい言葉を使う ○よいところ探しをさせて、自己肯定感をもたせる （★生徒同士が認め合うことで仲間づくりが促進される 生徒×生徒の良好な人間関係の構築）
	良好な人間関係の構築 外部の方との関わり	○よいところ探しなどで決め付けを弱める→班づくりの工夫→いろいろな人との関わりのよさを実感させる ○体験学習
		★継続した規律指導 ★安心できる教室環境 ★心が温かくなるコミュニケーション ★生徒同士の良好な人間関係・仲間づくり ★自尊感情の高まり→積極的な発表・行動へ

特　活 自　治	生徒が考え実践する委員活動 （活動の活性化） 仲間づくり	○活動内容の見直し ○活動内容を生徒が考える ○生徒から出てきた意見を流さない ○生徒が考えたことを実践させる→成功体験→ポジティブに動き出せる→自他ともに活躍・輝ける場面をもつ ○活動だけの時間を設定する ○生徒にルールを決めさせ、責任をもたせる ○文化祭など過去の映像を見せて、イメージを掴ませる ○伝統にこだわることなく、新しいものをどんどんつくり出す ★成功体験からポジティブな言葉遣いに！ ★成功体験からポジティブな行動に！ ★規律と創造性の融和 ★新しいものを生み出す

＊暖かいとは、「体全体で感じるあたたかさ」という意味の言葉。
　温かいとは、「部分的に感じるあたたかさや」「心で感じるあたたかさ」という意味。

新組織のメンバーによる研修

②　教育ＤＸ

令和５年度、本校は教育DX推進事業の指定を受け、効果的なICT活用について研究を行っている。その中で、教職員のICTスキル向上を目的とし、授業で活用している支援アプリの基本操作について研修を行った。ICT利活用について苦手な教職員もいるが、何より生徒たちが社会に出たときに活躍できることを考え、各教職員で活用法を試行錯誤しながら授業を行っている。

授業支援アプリの研修　　ICT を活用した人権学習

１学期の校内研究授業では、ICTを活用した人権学習について提案し、授業を行った。活用の様子を実際に見学し、ICT利活用のイメージを膨らませることができた。その後の研究協議では、ICT活用についても触れ、より効果的な活用についても話し合った。このように、ICTを効果的に活用し、生徒の学習活動がより活発で深いものになるよう、教職員間で研鑽を続け、深い学びにつながるよう研修を行っている。

また、教育 DX の中で「個別最適な学び」の実現ができるよう、研究を進めており、生徒は、朝の学習である「前進タイム」において、プリントによる学習だけでなく、タブレット等を活用して課題に取り組むこともある。学習の履歴を確認することで生徒は自分の学習を振り返り、再度取り組む際に間違えた部分に注意しながら復習することができる。生徒の取組を確認すると、間違えた部分を振り返りながら何度も学習に取り組むことで、少しずつ基礎知識の定着を図ることができてきている。これにより、学習に困難さを抱えた生徒も少しずつ学力をつけていくことができ、「誰一人取り残さない、個別に適した学習」につながっていると考えている。

タブレットを活用した個別学習

③　大阪コリアタウン

美馬郡教育会が主催する研修、大阪コリアタウンへのフィールドワークに、本校より11名の教職員が参加した。大阪コリアタウンは、大阪市生野区の御幸通り商店街を中心として、かつて朝鮮半島や済州島から多くの人が移り住み、朝鮮市場と呼ばれていた地域である。日韓ワールドカップ開催や韓流ブームに乗って整備され、今や観光地となっている。現在では５人に１人が外国籍という多様性あふれる地域コミュニティを形成している。特定非営利活動法人コリアNGOセンターに所属する在日コリアンの方が講師を務めてくださった。まず、御幸森天神宮で、朝鮮半島や済州島と、コリアタウンの関係などの時代背景を中心に説明していただいた。さらに、移動しながら店の前に立つ済州島の守り神（トルハルバン）や店に並ぶチマチョゴリなどを見学した。その後、朝鮮学校の前を通り、いくのパーク（生野小学校跡地）で、朝鮮学校の歴史や現状についてのことを中心にお話しいただいた。現地を訪れることで、異文化と共生・差別の歴史と現状を感じることができた。

大阪コリアタウンフィールドワーク

＜先生方の感想＞

・大阪コリアタウンの歴史や、在日コリアンへの差別等、大変勉強になった。多様性を受け入れ、認め合うことが人権尊重につながると改めて感じた。また、人権学習において「多様性を尊重しよう」という指導だけで終わるのではなく、どうして尊重しなければならないのかという背景をしっかり教えていかなければいけないと思った。

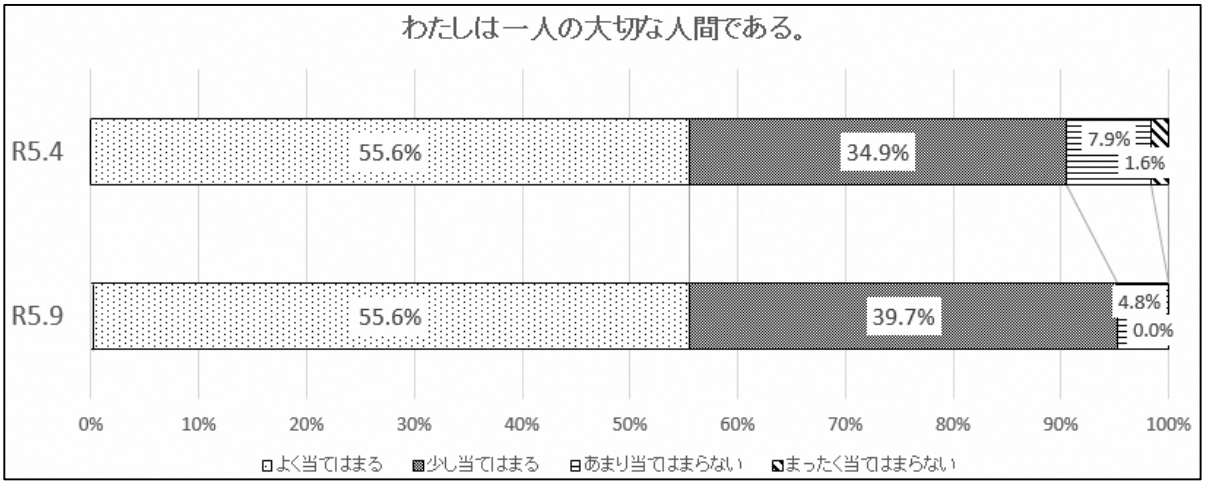
・やはり現地に行っての研修が一番実感しやすくわかりやすい研修であると再確認した。また、朝鮮学校の問題についても、もっと知るべきであり考えなければならないと思った。今後は、映像などの資料を授業に使い、現地で見たこと聞いたことも加え生徒とともに考えていきたい。
・実態に触れないと見えてこないものがたくさんあるということを感じた。人権問題について考えるときに、その問題の背景や歴史も踏まえ、話ができるようになるべきだと感じた。授業の中でも、表面的な部分だけで終わらず問題の根っこの部分について考えを深めることができるような指導を心がけていきたい。

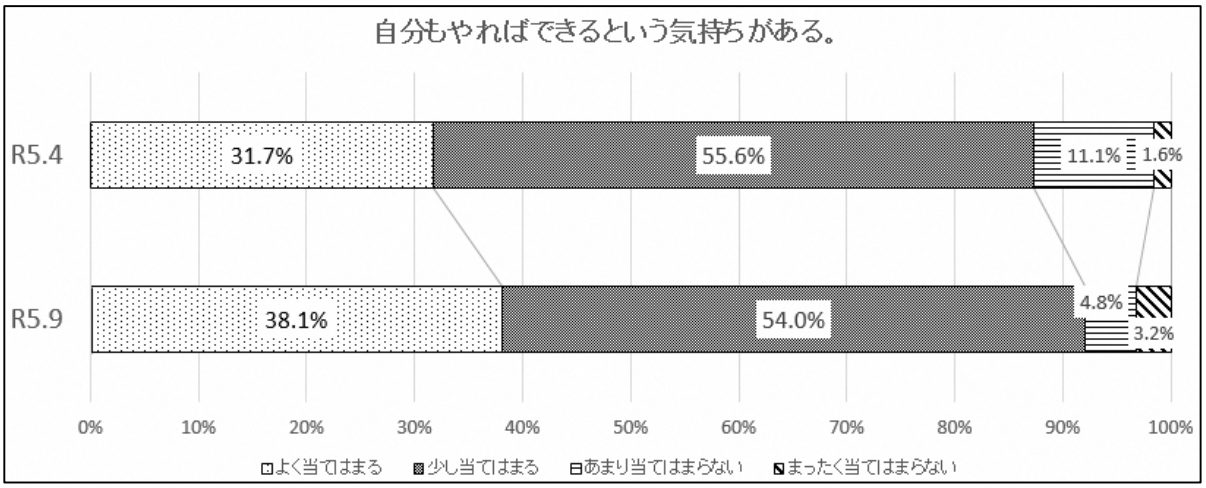
Ⅲ　研究の成果と課題

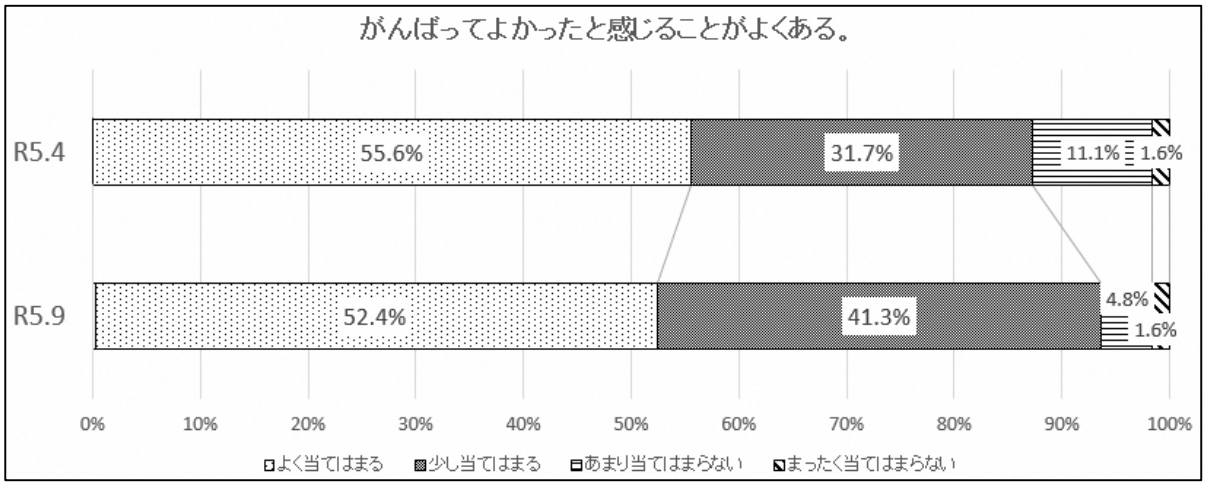
１　研究の成果

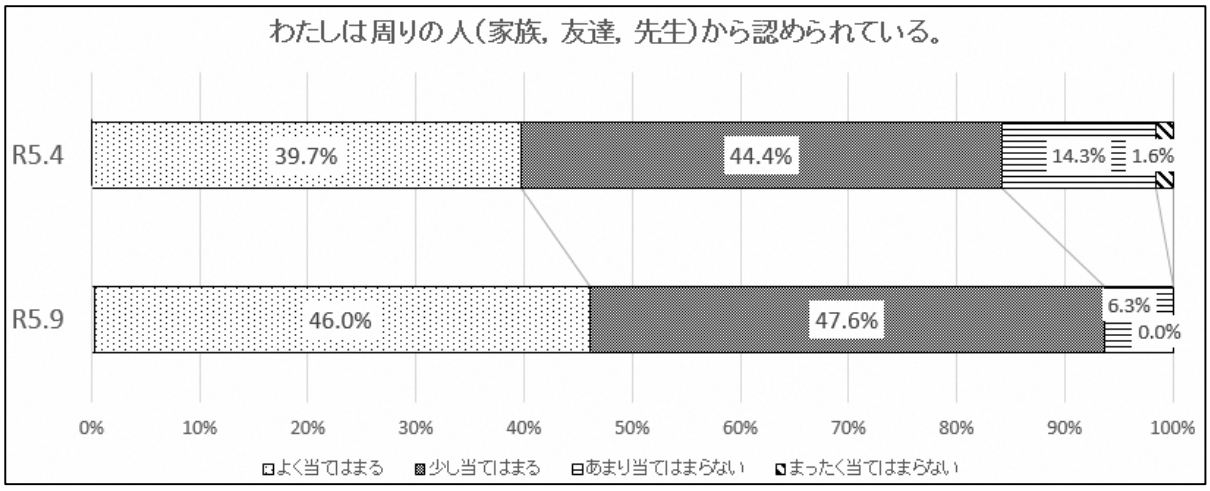
本校は、「令和５年度文部科学省指定中学校人権教育研究発表会」及び「第53回徳島県中学校人権教育研究大会」の会場校として、研究主題「多様性を認め合い、つながりを実感する人権教育の推進」のもと、昨年度より生徒の実態に即して、体験的な学習を重視し、発達段階に応じて学びを深めていく人権教育に取り組んできた。これらの取組の成果として次の５点があげられる。

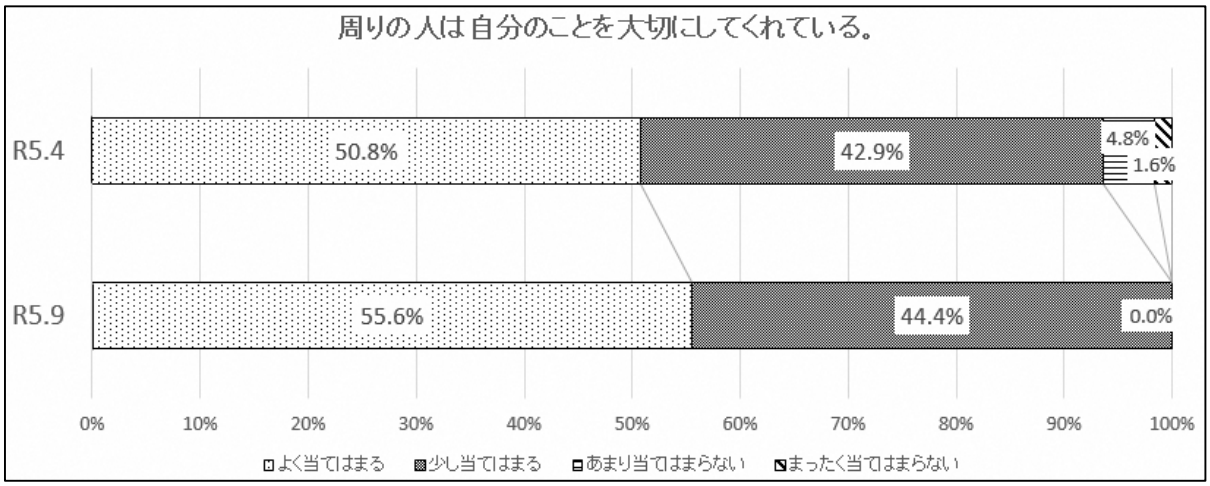
（１）生徒の自尊感情（自己肯定感・自己有用感）の向上

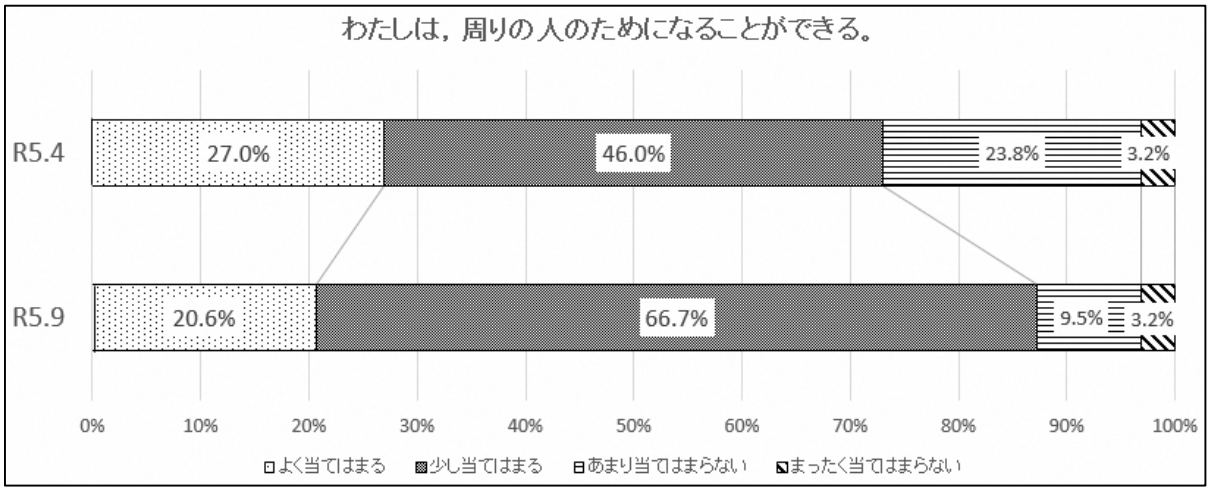








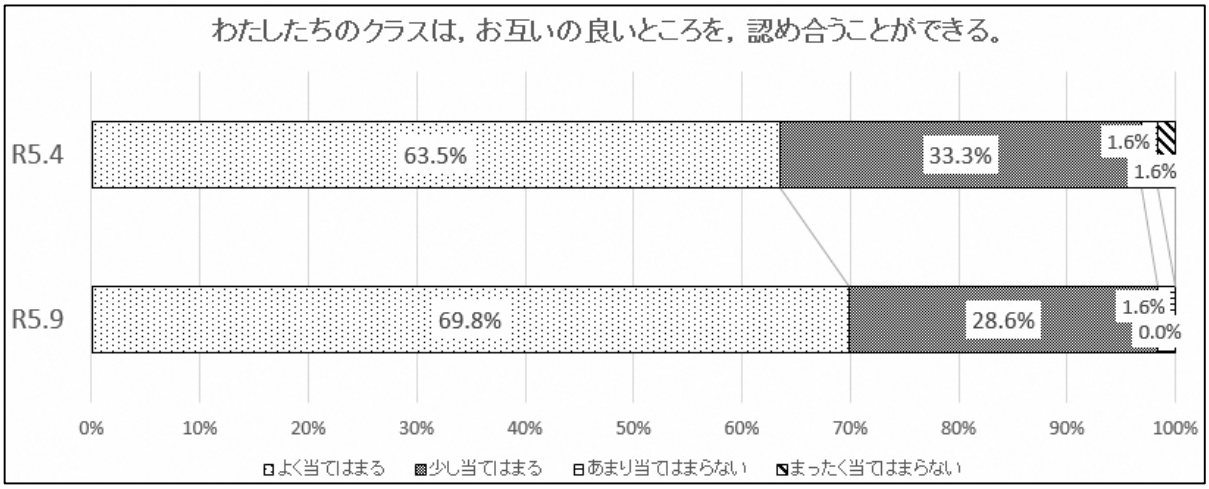


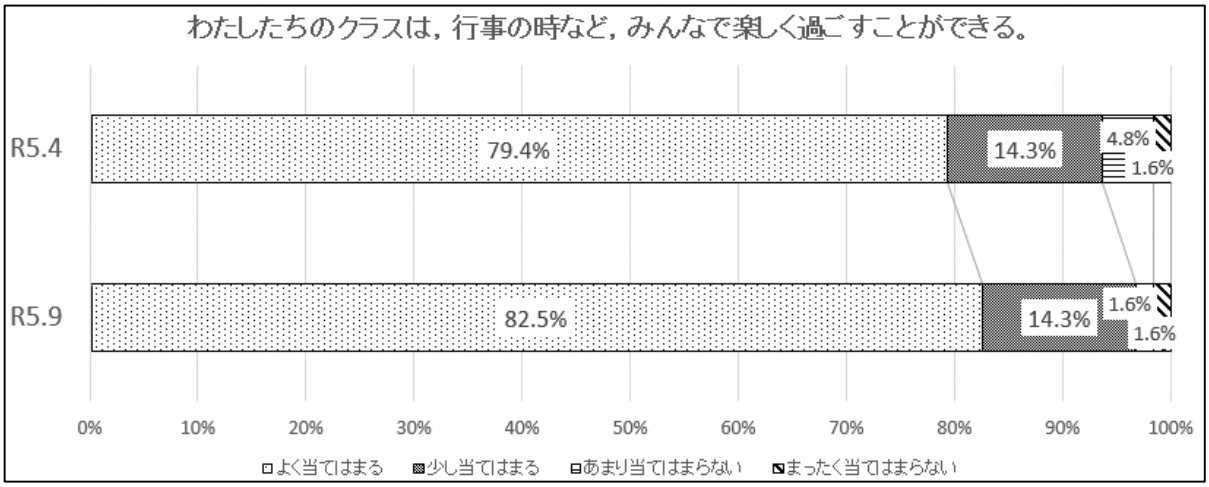


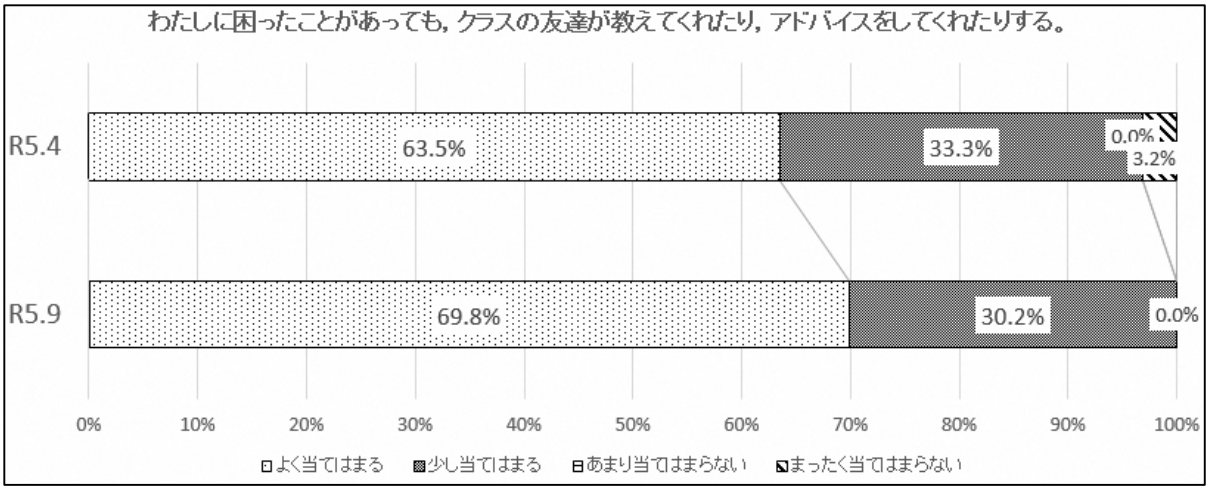
本校では「自尊感情」を「自己肯定感」、「自己有用感」、「自己効力感」の観点でアンケート調査を行った。上記のグラフは、令和５年４月と９月のアンケート結果を表している。９月には、９割以上の生徒が、「わたしは一人の大切な人間である。」「自分もやればできるという気持ちがある。」「がんばってよかったと感じることがよくある。」「わたしは周りの人（家族・友達・先生）から認められている。」と答えている。また、すべての生徒が「周りの人はわたしを大切にしてくれている。」と回答している。「わたしは周りの人のためになることができる。」という項目では、73.0%から87.3%と肯定的回答が14.3%も増加している。このような変化の理由は、人権教育の取組の中で、自分自身を大切にできるようになったこ

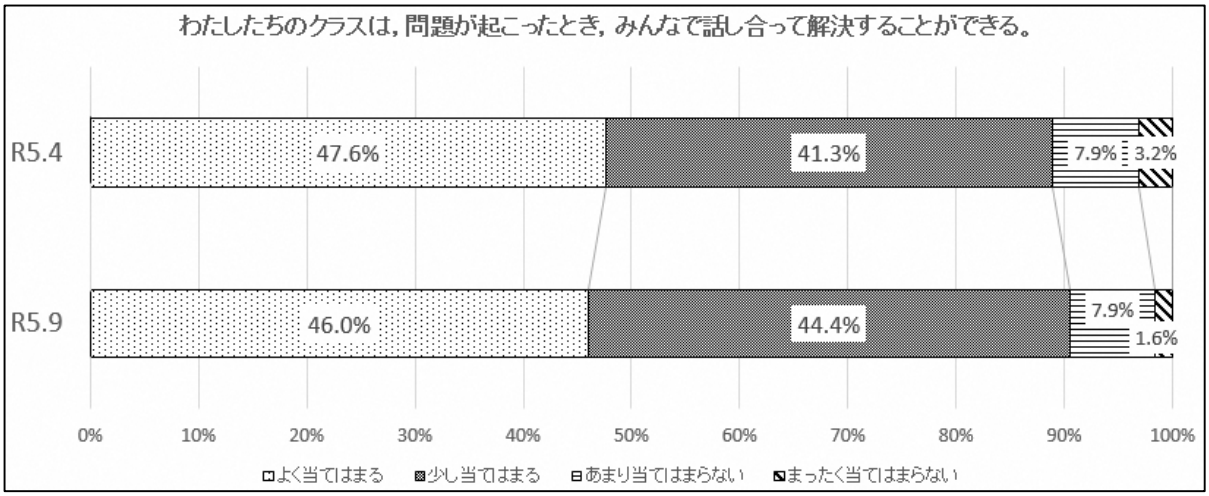
とや、周りの人との関わりの中で、仲間としてのつながりが実感できるようになったことにより、自己肯定感や自己有用感が高まったからではないかと思われる。また、本校は教職員が生徒に対してポジティブな行動支援（PBS）を心がけており、その日々の積み重ねが、生徒の励みになり望ましい言動が取れるようになってきたと推察される。さらに、自分が大切にされていると実感していることが他者を大切にすることにつながっていると思われる。

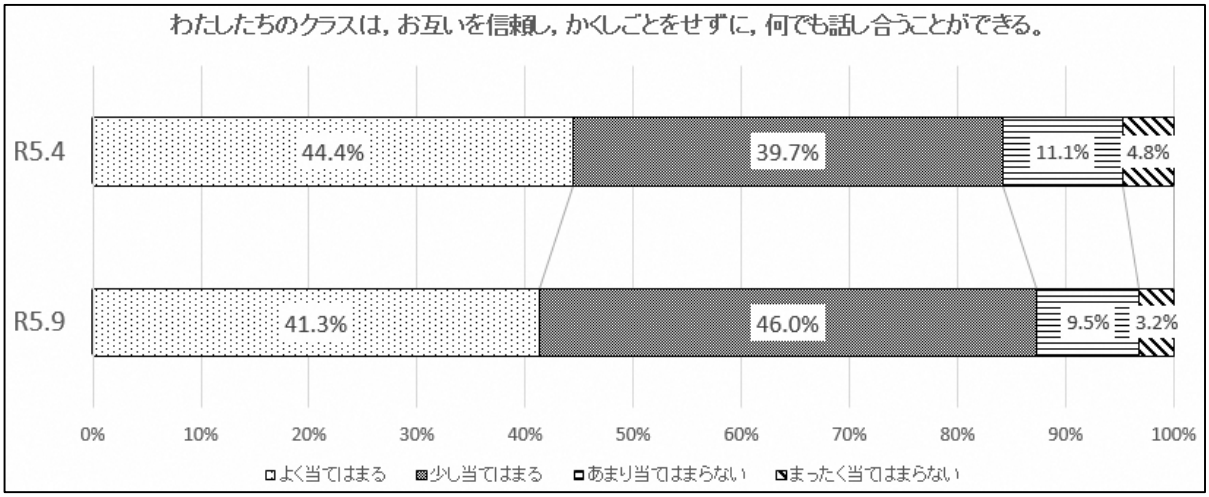
（2）多様性を認め合い自分も他人も大切につながりを深める心の育成（クラス効力感）

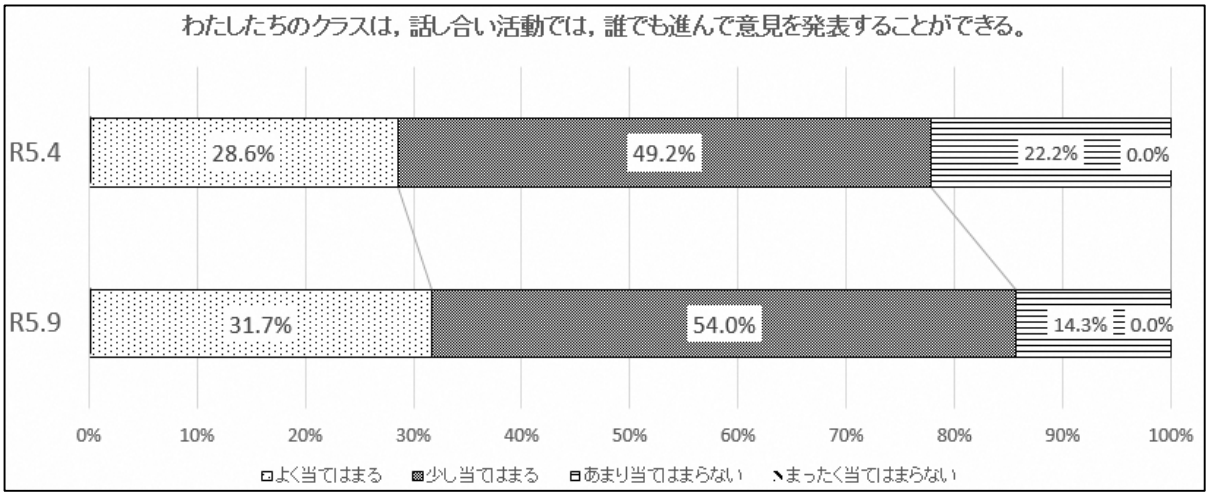












本校のアンケート調査では、「わたしたちのクラスは、お互いのよいところを認め合うことができる。」「わたしたちのクラスは、行事の時など、みんなで楽しく過ごすことができる。」と回答した生徒は９割を超えている。「違い」を「個性」と捉え、多様性の尊重から、一人一人のよいところを認め合うことで、行事などもみんなで楽しみながら団結力を強めることができていた。また、「わたしに困ったことがあっても、クラスの友達が教えてくれたり、アドバイスをしてくれたりする。」では、100％の生徒が肯定的回答であった。このことから、生徒同士が互いの個性を認め関わりあうことや、行事を通して団結を強めたことにより、信

頼関係が深まったと推測される。そのため、「わたしたちのクラスは、問題が起こったとき、みんなで話し合って解決することができる。」と回答した生徒は９割を超え、クラス効力感の高まりを表している。また、「わたしたちのクラスは、互いを信頼し、かくしごとをせずに、何でも話し合うことができる。」は、かなりの信頼関係がなければできないことではあるが、生徒の肯定的な回答が８割以上に増加している。そして、「わたしたちのクラスは、話合い活動では、誰でも進んで意見を発表することができる。」では、77.8%から85.7%に肯定的回答が増加し、安心して自己表現できる環境が整ってきたと言える。

この取組の中で、１年生では、もともと人数が少なく、学年の中の人間関係も固定化されがちであったが、YMCA阿南国際海洋センターでの集団宿泊活動を通して、互いにコミュニケーションを取り、意欲的に活動しようとする姿が見られた。他の生徒とコミュニケーションが取りにくい状況が続いていた他郡市から入学してきたＡさん、Ｂさんも、積極的に他の生徒と関わり、協力する場面が増えていった。生徒同士の関わりができるようになり、周りに意識を向けることができるようになってきたところで、障がい者や高齢者の問題を取り上げ、講演、実習等を行い、その確認として研究授業を行った。授業の中で、自分の考え・意見を人前で発表し、話すことが少しずつではあるができるようになってきた。特別支援学級に在籍する３名の生徒も、年度当初は学年の輪に入りにくそうな様子も見られることがあったが、行事等でも自分たちから積極的に加わることができるようになってきただけでなく、他の生徒も共に生活する仲間として、関わることができるようになってきた。我々教職員も、このような生徒の変容をこれからも見守り続けながら、共に学んでいきたい。

２年生ではトラブルを起こし休みがちだったＣさん、複雑な家庭環境もあり不登校気味のＤさんが、周りの生徒や教職員の働きかけによって休まなくなったり、登校日数が増えたりするようになった。この２人の行動の変容は、本人たちが自己と向き合い前に進んでいこうと決意したことが大きな要因の一つである。しかし、それだけでなく周りの生徒が、本人たちの行動や発言を肯定的に受け入れることができるようになったことも大きな要因であったと感じる。望ましくない行動をした仲間に対して否定的な言葉が出たり、周りのことを考えず自分本位な行動をしてしまったりすることも多かった２年生だが、自分以外の人のことも考えた発言や行動ができるようになりつつある。そのきっかけは、２年生になってから行ってきた人権学習の授業や講演会で、他者と共に生きることについて学んだことがあげられる。授業や講演の感想では、様々な課題を自分事として捉えたいということや、互いを認め合いながら自分とは異なる他者と共に生活してきたい、といった感想が多く見られた。自分のことだけでなく、他者を認めることや自他の権利を共に尊重し合いながら生活していくことを学んだ結果、クラスの中にいる様々な事情を抱えた仲間のことを、素直に認め合う心が育ったのだと感じる。

また、昨年度まで特別支援学級に在籍し、今年度通常学級に籍を移したＥさんは、教室で自分に障がいがあることをクラスメイトに語り、日本の特別支援教育についての意見を述べ、インクルーシブ教育への期待と課題をクラスで考えるきっかけをつくった。Ｅさんと共に生活してきた時間を思い返すことで、誰もが同じ場所で過ごしながら全員が成長できる環境をめざすには、支援を受ける側も支援をする側も正しい理解が必要だということに気付くことができた。そして、自分の苦手な分野では自分も支援を受ける側に回るということに気付いた生徒は、障がいの有無で判断するのではなく、誰にでもある得手不得手によって助けることも助けられることもあるという感想を授業で述べてくれた。このように、人権について考える授業や様々な課題に直面しながら過ごしてきた方の講演を聞くことで、生徒の人権意識は確実に育ってきた。そして、そのことが今の温かいクラスをつくることに寄与している。

３年生のＦさんは、入学後しばらくして不登校になったが、３年生ではリモート授業でクラスメイトとのつながりを感じ、識字学級生との交流もリモート授業で参加できた。その後、

午後から体調に合わせて授業に参加し、帰りの学活までクラスメイトとの生活ができるようになってきた。８月中旬からは、文化祭の準備をクラスメイトと行い、２学期からは午後から登校する日もあるが、毎日登校ができている。また、３年生のＧさんは、「外国人の母親をもつ自分は、周りの人から差別的な言葉をかけられる時もある。私は１，２年生まではクラスメイトとの人間関係が上手にできなくて学校を休むこともあった。ハンセン病や在日コリアン、識字学級との交流など人権学習をすることで自分の心の中が変わっていって、学校に来るのが楽しくなった。人権学習で正しいことを知って、人とどう関わっていくかを考える中で、みんなも変わっていったと思う。私自身に関心をもって話をしてくれるのがうれしい。SNSで同じ立場の中学生がいじめられて辛いなどと書いているのを読むと辛くなるけれど、私は優しくて親切なクラスメイトに感謝しかない。」と泣きながら伝えてくれた。また、３年生のＨさんは、LGBTQ+に関する「性的マイノリティについて」の講演会で、当事者の方にもきていただき話を聞いた。講演直後の感想文の中に、「今日の講演を聞いて安心しました。なぜなら、自分がそうだからです。でも、私がそうだとクラスのみんなは知っているけれど、誰もいじめや否定をしません。このクラスのみんなで本当によかった。私は自分らしく生きています。」と教員にカミングアウトをしてくれた。人権学習を重ねることで、自分事として捉え、自分が変わっていく中で周りとの良好な人間関係を築いていることは生徒、教員ともに大きな喜びである。また、生徒同士が人権学習を進める中で多様性を認め、自分も他人も大切にするためには自分がどう行動していくのかが問われているが、個々の生徒の変容は学級の変容として表れる。今後も、誰もが安心して学校に登校でき、日々心の成長が図れるように生徒の心の中を見つめる取組を続けたい。

（３）SDGs と人権学習プログラムの確立

SDGsの視点から、「誰一人取り残さない」「すべての人々の人権を実現する」ために、それぞれの人権課題学習にSDGsの該当項目や目標を示した。生徒は世界が抱える問題と自分が生活しているつるぎ町の抱える問題が共通していることから、自分の身近な問題であることに気付くことができた。「SDGsの話から、私は自分にできることはどんどんしていきたいと思いました。どんな小さな事でも、これからの地球のためにしていきたいです。少し先のことだけを考えるのではなく、数十年後はどんな世界になっていってるのかを考えて自分から行動していきたいです」「SDGsの17の目標を達成していかないと、つるぎ町自体が持続可能かどうか心配です。自分にとって身近な問題なので、人任せにしないで自分がどう行動するかが大切だと思いました」「SDGsのジェンダー問題やLGBTQ＋についてもっと学習して、多様性を認め合い、すべての人の人権を大切にできるように学習を進めていきたいです」などの感想から、SDGsの視点から、多様性を認め合い、つながりを大切にしようとする意識の向上が見られた。

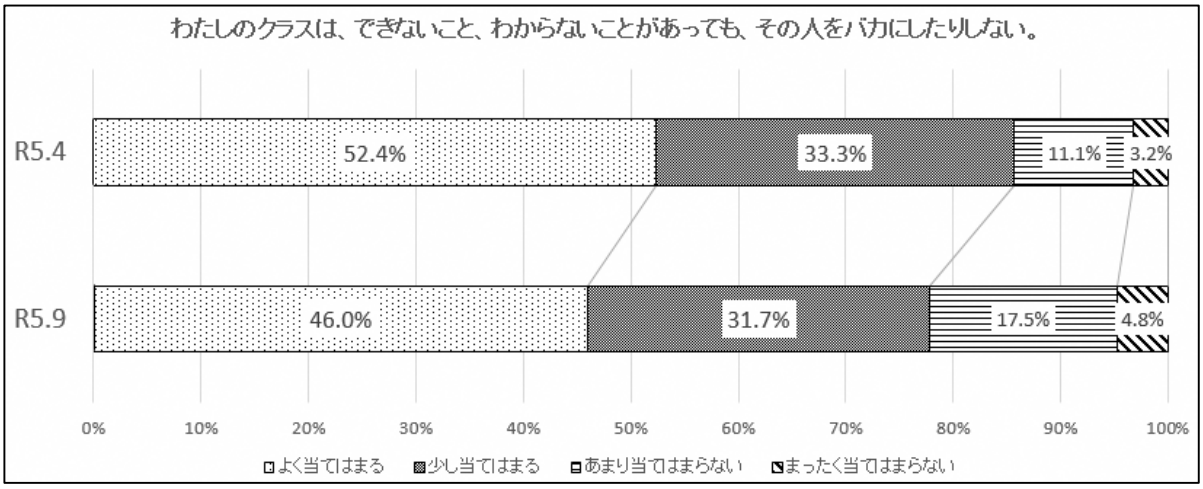
（４）教職員の人権教育推進に対する意識・授業力の向上

教職員で本校生徒の教育課題を共有し、今回の研究の柱と結び付け、課題解決を図れるように研修や人権教育の推進をしてきた。各学年の取組や担当教職員の学級経営が、生徒を通して授業に表れてくるため、プレッシャーを感じたり、やりがいも感じたりしながら、こんな人権意識や人権感覚をもった生徒集団に育てたいと、だんだんと教職員のねらいや意識が明確になり、感覚が磨かれていった。講演や体験学習などを通して、教職員が学び合うことが、生徒の学びを深めていくことにつながった。また、研究授業を公開することで、それぞれの指導方法のよさを学び、互いが切磋琢磨しながら、授業の展開や日頃の指導方法の改善点を探るきっかけにもなった。公開授業では、生徒の新しい一面の発見もでき、生徒理解を深めることができた。それらの一つ一つが、教職員の授業力や指導法の改善や向上につながった。

（5）家庭の人権意識の向上

保護者にとって、学校における人権学習がどのように行われ、子どもがどう感じどう育っているのかを知る機会は非常に少ないと思われる。そのため、学校と家庭をつなげ、学校での学びを家庭で広げたり、深めたりしてほしいという願いから、「人権フォーラム新聞」を作成した。全校で行った人権講演会、各学年で行った人権学習についての生徒の感想を、自宅に持ち帰り保護者に読んでもらった。そして、子どもの感想を読んだ保護者の感想を新聞に掲載し、各家庭に配布することで保護者同士も互いの考えや意見を知ることができた。「子どもが書いた感想を読んで、子どもが何を学び、何を考えたのかよくわかった。家で人権問題について親子で語り合うことも大切だと思いました」「子どもの感想を読んで、自分も中学生の時はこんな学習をしたなと思い出しましたが、大人になると日々の生活に追われて、人権問題について考えることを忘れていたように思います。大人も子どもも一緒に考えることが大切だと思いました。子どもにこんな子に育ってほしいと思うのであれば、親が生き方を一緒に考える機会が必要です。そのきっかけになると思いました」などの感想もあり、家庭の人権意識の向上を図ることができた。

2　今後の課題



アンケート結果から、生徒の自尊感情（自己肯定感・自己有用感）や、多様性を認め合い自分も他人も大切につながりを深める心の育成（クラス効力感）の向上は見て取れたが、「わたしのクラスは、できないこと、わからないことがあっても、その人をバカにしたりしない。」の項目において、否定的な回答が14.3%から22.3%に増加している。

これは、人権学習を進める中で、生徒が仲間にとる言動に対して、周りの生徒の人権意識が向上したために、正しい判断ができるようになってきたから起こる傾向だと考えることもできる。人権意識の向上や言動の変容は人によって異なる。そのため、まだ意識の向上が十分でない生徒や意識にムラがありトライアンドエラーを繰り返している生徒もいる。その生徒を取り残さないために、どうすれば望ましい言動がとれるのかを考えさせるためにも、教職員のポジティブな行動支援（PBS）が必要となる。生徒の変容に合わせて、教職員が臨機応変に生徒理解や生徒指導の方法を工夫していかなければならない。人権学習は、積み重ねることで生徒の意識も変わってくる。「継続は力なり」の通り、今後も教職員自らが研鑽に励み、人権教育の推進を図らねばならない。また、社会のめまぐるしい変化の中でも、柔軟に対応していける力も必要である。そのために、一人の力ではなく、多様性を認め合い、つながりを大切にした教職員集団として前進していきたい。